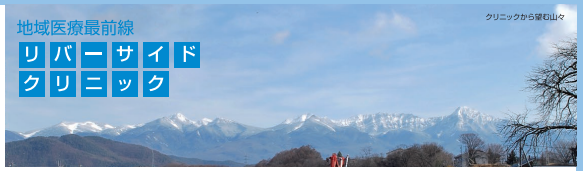
地域医療最前線

リバーサイドクリニック



クリニックから望む山々

地域医療の未来を見据えて

長野県の中部に位置する諏訪盆地の中央にあり、八ヶ岳山麓の美しく豊かな自然を舞台に縄文文化が花開いた茅野市。リバーサイドクリニックは、茅野市を流れる上川という清流沿い、駅から歩いて10分ほどの市街地にある。

クリニックの前身は諏訪中央病院の分院として平成5年からスタートしたリバーサイドホスピタル。平成10年6月に病床を本院の諏訪中央病院に移して無床の診療所となり、平成13年に組合立から茅野市立の診療所に変わった。このときに建物を新築し、保健福祉サービスセンターとクリニックを併設。茅野市西部エリアの保健・医療・福祉の拠点となっている。

所長は安藤親男先生。本誌シリーズには2回目の登場となる。前回の取材は平成13年3月。出来立てほやほやのクリニックを訪問し、ただ一人の常勤医師として活躍する様子を紹介した。

今回の取材は1月中旬。クリニックに向かうに連れて雲が晴れ、上空には澄んだ青空が広がる。ときどき吹く冷たい風に取材を前に気が引き締まった。

クリニック外観

クリニック裏手を流れる清流上川

患者さんに近い場所で

安藤先生は、かつてのリバーサイドホスピタルに平成6年に赴任し、平成8年に同ホスピタルの院長に就任。その後、病院が診療所、さらに現在のリバーサイドクリニックになったことに伴いクリニックの所長に就任した。

病院長から続いてクリニックの所長に就任した先生だが、もともと「診療所をやってみたい」という思いがあったという。「患者さんの生活している場所に最も近いところで、患者さんとその家族ができるだけ元気に自分の人生を歩むお手伝いをしたいと思っていた。いま、それができているかはわからないが診療所へ来てよかったと思っています」と当時を振り返りながら話した。

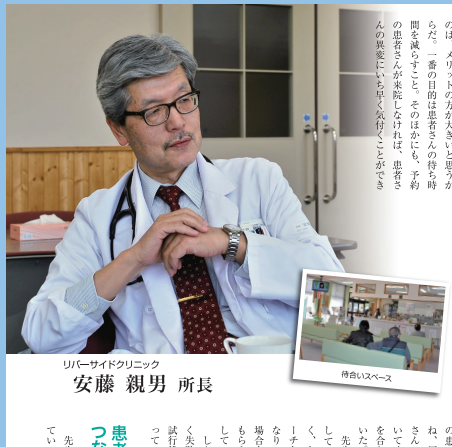
クリニックには、4月に新しい医師が赴任し常勤医師は安藤先生を含めて3名。そのうち一人は現在、育児中ということで時短勤務になっている。そのほかに近隣の病院の初期研修医や、不定期ではあるが診療所研修の後期研修医を受けれていて、活気あふれるクリニックになっている。

患者さんのメリットを考えて

クリニックの1日の患者数は訪問診療を含めて約70人。「国保診療所では珍しい『予約診療』を基本にしている。

予約診療の場合、具合が悪いのに予約の日でないと来ないという支障と思った患者さんがいたり、高齢者だと予約をして一度クリニックを出て行った人が「あっ、この日はだめだった」とまた戻ってきたりと予約に手間が掛るというデメリットがあるという。

それでも予約診療を基本にしているのは、メリットの方が大きいと思うからだ。一番の目的は患者さんの待ち時間を減らすこと。そのほかにも、予約の患者さんが来院しなければ、患者さんの異変にいち早く気付くことができる。さらに、若い医師は決の日に来院する患者さんが分かると事前に予習をして診療に当たることができるそうだ。これは家庭医療の勉強の上でもいいことだという。



待合いスペース

リバーサイドクリニック
安藤 親男 所長

試行錯誤のアプローチ

取材当日、先生にお話を聞く前にクリニックでの診療の様子などを撮影させてもらった。撮影時に来院した高齢の患者さんに「雑誌の取材があってね、写真撮ってもいいですか」と患者さんの了承をゆっくりとした口調で聞いていくれる先生。診療に入ると、目線を合わせて患者さんの話に耳を傾けていた。

先生は、患者さんの接し方を工夫しているそうだ。「少しよそよそしくて、ちょっと距離を置いた方がアプローチとして有効な場合もあるし、かなりフレンドリーにした方が有効な場合もある。どうやったら一番間いてもらえるのかを常に考えながら診療をしている」とこう。

しかし「いつもうまくいく訳ではなく失敗することも多い」と言い、日々試行錯誤をしながら患者さんと向き合っている。

患者さんとのつながりを大切に

先生が日ごろの診療において意識していることは「HIPF（ファイフ）」という家庭医療学の医療面接の基本だ。

H（Healing）は、患者さんの気持ち。I（Idea）は、病気に対する患者さんなりの解釈。3文字目のF（Function）は、日常生活にどのような支障を来しているか。E（Expectation）は、何を期待してクリニックに来ているか、将来どうなりたいか。

家庭医は、普段、疑問に思っていることや、相談したいことを相談できるのが理想。そういうことを言ってもらえるような雰囲気作りを心掛けているという。

一番難しいのは患者さんなりの解釈と実際の病態が違っているときにその認解を解く作業だ。患者さんの希望する治療ではない治療をしたいときに、

それを理解してもらうのが非常に大変で、ときにはできないこともあるという。「あまりやりすぎると患者さんとの関係性を悪くしてしまう可能性もある。関係が切れないように、つながり続けることが大切」と患者さんとの信頼関係を大切にする姿勢が見て取れた。

若い医師たちと共に成長する

平成16年に初期臨床研修が始まり、クリニックに初期研修医が来るようになった。また、平成22年から日本プライマリ・ケア連合学会の家庭医療の後期研修を受け入れている。研修医が来たことで指導医という立場になった先生。人に教えることは、自分を見直す作業でもあり、自分の仕事を振り返ることができるようになったという。

また、若い医師たちと一緒に学ぶことで、これまで自分がとってきた家庭医としての仕事を「言語化する」ということができるようになったなぐ。これは先生にとってとても大きなことだったという。「最初は、診療以外の仕事が増えることから嫌だなという思いもあった。しかし今思うと、若い先生と一緒にやるということが私にとってはとてもいいことだった」と、若い医師の育成のみならず、先生自身も得るものが大きかったようだ。

保健・医療・福祉の拠点

茅野市では、平成12年に地域福祉計画（通称：ピーナスプラン）がスタートした。ピーナスプランのコンセプトの一つが、保健と福祉の総合相談窓口である保健福祉サービスセンター茅野市に4月所作り、そこに医療機関を併設して医療との連携を図るというものの。小さな村であれば、保健・医療・福祉の各部門が一つの建物にあるのは珍しいことではないが、人口が6万人近い市でこれを実行したというのは当時として先進的だった。

クリニックと西部保健福祉サービスセンターは、茅野市の中でもモデル的な形として作られ、現在も保健・医療・福祉の連携の拠点として市民にとって身近な相談窓口になっている。クリニックの廊下からながめる保健福祉サービスセンターには、取材当日も相談に訪れる人が見られた。

クリニックから保健福祉サービスセンターにつながる

リバーサイドクリニックの特殊性

保健福祉サービスセンターが併設されているクリニックには、高齢者や障害を持った患者さんが多く、問題を抱えている人が多い。また、周辺に幾つも診療所があるなど、その立地が他の国保診療所と違うという特殊性がある。これは、患者層の違いに表れているという。

「患者さんの年齢層、病気の種類という意味では、他の国保診療所の方がバランスはいいと思う。家庭医療の研修をするフィールドとして考えた場合には、クリニックは必ずしも理想的ではないかもしれない」と明かした先生だが、それでもクリニックでは複数の医師で教育をする環境を整えている。これは「若い医師の教育や研修をやっていきたい」という先生の思いがあるからだ。「若い医師たちが将来、国保診療所に行ってくれるといいかなと思っています。まだ先ですけどね」と若い医師たちの将来の活躍に期待している。

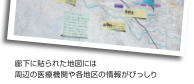
医師が変わっても変わらない診療

若い医師の育成に力を注ぎたいという先生だが、特に若い医師については長く同じ土地に居続けるということは難しいという。そのため、一人の医師がずっと同じ場所にいて同じ患者を診るということではなく、医師が変わっても診療の内容が変わらない、そういう意味での継続性が大切だという。

患者さんからすると同じ医師に継続して診てもらえる方がいいのではないかとも思うが、その点について先生は「患者さんはある程度、医師が変わることには慣れている。もしかしたら患者さんの方が、私たちが考えている以上にドライなのかもしれない」と分析している。大切なのは同じ医師に診てもらうことではなく、医師が変わっても診療の内容が変わらないこと。そのためには、複数の医師で複数の診療所をカバーするという体制がこれからの時代に必要とされる形ではないかと示した。

訪問診療は愛用の車で

2017年4月復刊
「リバーサイドクリニック通信　かみがわ」



廊下に貼られた地図には
周辺の医療機関や各地区の情報がびっしり

国保直診施設のみにとらわれない連携

先生は、茅野市国保北山診療所やクリニックの出張診療所である泉野診療所のほか、茅野市の隣、原村にある原村国保直営診療所でも月に数回、診療を行っている。原村診療所での常勤医師は1名のみのため、国保直診施設のほか厚生連の病院からも医師が派遣されている。先生は「厚生連の拠点である地域の診療所に医師を派遣しているというモデルがある。国保直診の中だけで完結しなくても、他の医療法人と連携し協力し合うことをめざしてもいいのではないかと」と言い、地域医療を支えていくうえで国保直診施設のみにとらわれない連携に期待している。

多職種で関わる

ピーナスプランの中で、先生が一番関わっているのは認知症の分野だ。今後、ますます認知症患者が増えるといわれているが、先生は日々の診療の中、この10年で認知症患者が増えたということを実感するそうだ。認知症はいずれ国が癌になっていて、これを管理していくことは診療所の役割の一つだが、医師だけで対処していくことは難しいという。

茅野市ではピーナスプランの中で、認知症をなどにより自らSOSを発信できない人への支援や認知症についての学習会などを行っている。これにより、認知症への理解は深まってきたとはいえるが、まだまだ偏見もあるという。「できるだけそのような生活できるように、どのようにして皆で支えていくかというのが認知症の中心になってくる。そこに関わっていきたい」という先生の言葉から多職種で連携する重要さと患者さんに寄り添う姿勢を感じた。

スタッフ勢ぞろい

平成13年の取材で「さまざまな健康障害に幅広く対応できる医師を育成し、自分自身もそのような医師になることが目標」と語っていた先生。その思いは今も変わることなく、目標に向かって取り組みを続けている。「患者さんが自分らしく元気に生を夢を手助けを」という先生の初心につながるその思いは、これからも変わらず先生の原動力になっていくのだろう。